

活 動 報 告

日本語教育部門：日本語・日本事情 (1998年4月～1999年3月)

田 村 泰 男

1. 授業科目一覧

授 業 科 目	開単 位 設数	学 期 別 週 授 業 時 数			備 考
		前 期	後 期	通 年	
◎ 日 本 語 I A	1	2	2		広島大学外国人留学生のための授業である。 日本語 I A から日本語 II F までは通年の授業ではない。 ◎印の授業は東広島、霞の両地区で開講。
◎ 日 本 語 I B	1	2	2		
日 本 語 I C	1	2	2		
日 本 語 I D	1	2	2		
◎ 日 本 語 II A	1	2	2		
日 本 語 II B	1	2	2		
日 本 語 II C	1	2	2		
日 本 語 II D	1	2	2		
日 本 語 II E	1	2	2		
日 本 語 II F	1	2	2		
日 本 語 III A	2	2	2		
日 本 語 III B	2	2	2		
日 本 語 III C	2	2	2		
日 本 語 IV A	2	2	2		
日 本 語 IV B	2	2	2		
日 本 語 IV C	2	2	2		
◎ 日 本 語 V A	2	2	2		
日 本 語 V B	2	2	2		
日 本 語 V C	2	2	2		
日 本 語 V D	2	2	2		
日 本 語 V E	2	2	2		
日 本 語 V F	2	2	2		
日 本 語 V G	2	2	2		
日 本 事 情 A	2	2	2		
日 本 事 情 B	2	2	2		
日 本 事 情 C	2	2	2		
日 本 事 情 D	2	2	2		
日 本 事 情 E	2	2	2		
日 本 事 情 F	2	2	2		
日 本 事 情 G	2	2	2		

2. 授業内容

(東広島キャンパス)

レベル 1

授業科目	日本語ⅠA・ⅠB・ⅠC・ⅠD
担当教官	堀田泰司・迫田久美子・渡辺久美・渡部浩見
目 標	かな及び基本的な漢字の読み方・書き方、初歩的な文法を習得させる。
内 容	1. 文字の導入 2. 基本文型の導入 3. 音読練習 4. 口頭及び筆記による応用練習
テキスト	コンパクトジャパニーズ1

レベル 2 - 1

授業科目	日本語ⅡA・ⅡB・ⅡC
担当教官	堀田泰司・下村真理子・渡部浩見
目 標	初級クラスで学習した基礎的な語彙・文型・表現の定着をはかるとともに、語彙力を高め、豊かな表現力を身に付けさせる。加えて種々の場面に応じた実用的な日本語能力を習得させる。
内 容	短文を中心に構成され、会話を多く取り入れた教材を用い、場面に応じた適切な表現を学びながら、既習の語彙・文型・表現の応用練習を行う。併せて新出の語彙・文型・表現を口頭練習、書く練習によって学習し、より日本語らしい表現の習得を目指す。
テキスト	コンパクトジャパニーズ2

レベル 2 - 2

授業科目	日本語ⅡD・ⅡE・ⅡF
担当教官	田村泰男・下村真理子・渡辺久美
目 標	初級クラスで学習した基礎的な語彙・文型・表現の定着をはかるとともに、語彙力を高め、豊かな表現力を身に付けさせる。加えて種々の場面に応じた実用的な日本語能力を習得させる。
内 容	1. 文型練習の積み上げにより文型・語彙の定着をはかる。 2. あいさつなどの慣用的表現を学び、場面や状況にふさわしい表現能力を養う。 3. 短い会話をテープで聞き、内容の要点を把握する練習と質問に答える練習を行う。
テキスト	新日本語の基礎Ⅱ

レベル 3

授業科目	日本語ⅢA・ⅢB
担当教官	橋本敬司
目 標	中級レベルの長い文章を読み、それが何を伝えようとしたものであるかを確実に読み取る読解力を身に付け、更にその内容を的確に言語表現できる能力を養うことを目標とする。
内 容	授業は、日本の生活・習慣などを題材としたテキストを用いて行う。日常よく用いる言葉及び表現文型をできるだけたくさん確実に覚え、それらを使った例文を作る練習をする。各課の終了後は、理解の程度を確かめるために、必ず口頭で文章の内容について発表すると共に、各自質問紙に答えてもらう。
テキスト	日本語中級読解入門／日本語 2ndステップ

授業科目	日本語ⅢC
担当教官	中園博美
目 標	実際の講義やニュースを聞いて理解できるようになるための準備段階として本授業を位置付け、一定の長さがある聴解教材の内容の概要把握ができるような聞き取り能力を身に付けることを目標とする。また、聞いて分かる理解語彙を増やすことも目標とする。
内 容	ランゲージ・ラボ（LL）を利用し、全体授業に加え、個別学習・個別指導を行う。
テキスト	毎日の聞き取り50日上・下

レベル 4

授業科目	日本語ⅣA・ⅣB
担当教官	田村泰男
目 標	日本語Ⅲまでに学習してきた項目について確実に運用できるようにさせるとともに、日本語の「聞く」「話す」「読む」「書く」の四技能をバランスよく身に付けさせる。
内 容	読解用教材を読むことによって、既習の文型・語彙・表現を整理し、併せて新しい文型・語彙・表現を学習する。その際、口頭練習で定着をはかるとともに、書き言葉に属する言い回し、或いは文型を「書く」作業によって練習し、文章レベルでの理解をはかる。これらの作業の後、教材の内容理解を確認するために練習問題を使って質疑応答を行う。
テキスト	日本語中級読解／テーマ別中級から学ぶ日本語

授業科目	日本語IVC
担当教官	中川正弘
目 標	日本語作文を書くことで、文法や語彙をその選び方、使い方として理解させる。
内 容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 作文例を分析しながら読むことで、テーマ、内容を考えるだけでなく、文法や語彙についての理解を正す。 2. 作文例と同じテーマで自分でも作文を書く中で、いろいろなスタイルの使い分けや、辞書にでてくる類義表現の選び方など、ことばの能動的な運用練習をする。 3. 作文はすべて添削した後返却するので、自分の日本語の弱点を確認し、学習の目標をはっきりさせる。
テキスト	作文例と文法、語彙をまとめたプリントを毎回配布する。

レベル5

授業科目	日本語VA
担当教官	深見兼孝
目 標	時事日本語の聴解能力を養い、併せてそれに特有の語彙・表現を学習する。
内 容	<p>A. 時事論評を聞き、その内容を理解する練習を行う。 後にそれを文字化したものを読み、理解を補足する。 さらに重要語句の使い方について練習する。</p> <p>B. ニュースを聞き、</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) その内容を理解する練習を行う。 2) スクリプトの完成を行う。
テキスト	市販の中・上級用教材の一部と付属のテープ及び、自主教材。

授業科目	日本語VB
担当教官	中川正弘
目 標	日本語における「表現」の様々な側面を考察することで、内容や文法のレベルにとどまらず、表現行為や解釈行為まで含めた「ことば」とはどんなものであるかを理解する。
内 容	文章練習とその徹底的な分析を柱とする。ほぼ毎週短い作文を提出してもらい、これは当然添削して返却するが、添削では到底表すことができない日本語という言葉の問題、誤用の分析、また言葉の「選び」などに現れる日本文化、日本社会の考察を通して、外国人の日本語と日本人の日本語を隔てているものが何であるか検討してゆく。
テキスト	用例分析のプリントを毎回配布する。

授業科目	日本語VC
担当教官	長谷川伸次
目 標	経済・産業用語理解と活用の把握。
内 容	主として新聞・雑誌の産業経済欄・社会欄を取り上げてその読解力を深めると共に、取り巻く社会と環境問題を討議しつつ、語彙と活用法を修得する。
テキスト	自主教材

授業科目	日本語VD
担当教官	田村泰男
目 標	類義語・慣用句を中心とした語彙や上級文法を習得させることによって日本語の読解力・表現力を高める。
内 容	主として、語彙を中心に授業を行う。 1. 漢字の訓読み、特別な読み方をする漢字 2. 類義語・類意表現 3. 慣用句 4. 接頭辞・接尾辞 5. 新聞の語彙・表現
テキスト	自主教材

授業科目	日本語VE
担当教官	中園博美
目 標	ワープロを使い、様々な書式にしたがった日本語の文書が作成できるようになること、また、コンピュータを利用し、日本語の電子メールを送れるようになること、の二つを目標とする。
内 容	1. コンピュータ、及び日本語ワープロの基本的な操作方法 2. 日本語入力の方法（ブラインドタッチ、ローマ字入力） 3. ひらがな、かたかな、漢字を含む文の入力、変換 4. 定形文書（例：手紙文、レポート）作文練習 5. 日本語電子メール作成・送付実習
テキスト	適宜プリントを配布する。2HDのフロッピーを用意すること。

授業科目	日本語VF
担当教官	高永茂
目 標	物語の展開を理解し、登場人物の考えや気持ちを、行動を通して読みとることができるようにさせる。さらに、表現を根拠にして、人物像や情景を読み取ることができるようにさせる。
内 容	<p>1. 「注文の多い料理店」(宮沢賢治作)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全文を通読し、読みの確認をする。 ・場面分けをし、物語のあらすじをつかむ。 ・登場人物の考え方や性格を読みとる。 ・二人の紳士の行動や会話から、その心情を読みとり、作者の意図を考える。 <p>2. 「字のないはがき」(向田邦子作)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全文を通して、印象に残った表現及び、疑問点をまとめる。 ・登場人物について、それぞれの人物像を読みとる。 ・「父」に対する私の心情の変化について考える。 ・全文を読み、「家族」の在り方について考える。 <p>以上のほか、適宜、新聞の記事などを用い、授業を行なう。</p>
テキスト	自主教材

授業科目	日本事情A
担当教官	浮田三郎
目 標	日本の諺を学ぶことにより(時には世界各国の諺と対照比較して)、日本語的な表現、日本的な考え方、日本の文化・風土などの理解を目指す。
内 容	日本の代表的な諺を、時には世界各国の諺と対照比較しながら、日本語的な表現、日本的な考え方、日本の文化・風土を学習する。各々の諺がもっているテーマやそこで使用されている素材を考える。諺の表現の特徴やおもしろさを考える。簡単なクイズ形式の設問を用いて考えてみる機会を与える。各々の諺について、留学生達の意見、対照比較できるような自国の諺や表現とその考え方を発表してもらい、意見の交換をする。
テキスト	自主教材

授業科目	日本事情B
担当教官	長谷川伸次
目 標	日常生活や社会的慣行の中に息づく日本の伝統文化や社会的風土を観察・認識することで、時事問題へのより深い理解と学習を目指す。
内 容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 新聞、雑誌等を梃子として、日本の社会的経済的問題点を討議する。 2. 日本人・日本社会の思考体系や行動様式を討議する。 3. 必要に応じて公共施設や企業訪問を実施する。
テキスト	自主教材

授業科目	日本事情C
担当教官	今年度は開講せず。
目 標	
内 容	
テキスト	

授業科目	日本事情D
担当教官	中園博美
目 標	日本という異文化社会において、留学生が支障なく生活してゆくために必要と考えられる、日本社会のしくみや日本人の生活様式、習慣、価値観等に関する知識を習得し、それらに対する理解を深める。
内 容	「日本人とのコミュニケーション」、「日本人の生活」、「日本の教育」、「外国人と日本社会」の4つの大きなテーマに基づき、教師による講義、ならびに学生による発表によって、授業を構成する。学生は、教師から一方的に、特定の情報や知識を習得するだけではなく、発表やディスカッションを通しての主体的、積極的な授業参加が要求される。(受講学生は十分な日本語運用能力が必要。)
テキスト	適宜プリントを配布する。参考文献は授業中に紹介する。

授業科目	日本事情E
担当教官	今石正人
目 標	戦後の日本映画をいくつか観賞することで、広くは日本文化と社会、狭くは家族関係の変遷についての理解を深めさせる。
内 容	小津安二郎の「東京物語」、山田洋次の「家族」、森田芳光の「家族ゲーム」を比較検討する。 戦後の歴史、時代背景、監督、主題、家族の描かれ方、観客の反応・評価について説明し、学生の出身国の家族形態との比較や相違点・類似点などをディスカッションする。
テキスト	小津安二郎「東京物語」、山田洋次「家族」、森田芳光「家族ゲーム」ほか
参考文献	佐藤忠夫「映画をどう見るか」講談社新書 1976年、 佐藤忠夫「見ることと見られること」日本評論社 1991年 川本三郎「今ひとたびの戦後日本映画」岩波書店 1994年、 Donald Richie, Japanese Cinema, Oxford U. P., 1990 Ian Bruma, Behind the Mask, A Meridian Book, 1985 Tadao Sato, Currents in Japanese Cinema, Kodansha, 1982

授業科目	日本事情F
担当教官	玉岡賀津雄
目 標	言語処理に関する基本的な特徴を異言語間で比較考察することによって、異文化間のコミュニケーションで起こる多様な現象を理解する。
内 容	本授業は、「異文化間コミュニケーション」と題して、以下のことを学ぶ。 (1)言語処理における音声・書字・統語・意味的要素、(2)単語の形態素構成および単語自体の様々な特徴による認知処理への影響、(3)文章の統語的分析とその認知処理、(4)意味的な認知、さらに(5)言語を超えた社会・文化・習慣的な知識の言語理解への影響について、日本と他の言語を比較考察することによって、普遍的または特殊な言語認知処理モデルを模索する。
テキスト	必要な文献を紹介またはプリントして配布する。

授業科目	日本事情G
担当教官	金田智子
目 標	異文化が接触する日本語使用場面を題材に、日本文化や日本語に対する理解を深める。
内 容	主に学生自身が体験した日本語使用場面、あるいは異文化接触場面におけるさまざまな摩擦をとりあげていく。それらを題材に摩擦の原因とその影響を考えながら、日本文化や日本語に対する理解を深める。同時に、異文化への適応と日本語習得との関係にも触れ、摩擦解決の方法を探っていく。
テキスト	プリント教材

(霞キャンパス)

レベル 1

授業科目	日本語 I A・I B
担当教官	山中康子・渡部浩見
目 標	かな及び基本的な漢字の読み方・書き方、初歩的な文法を習得させる。
内 容	1. 文字の導入 2. 基本文型の導入 3. 音読練習 4. 口頭及び筆記による応用練習
テキスト	コンパクトジャパニーズ 1

レベル 2

授業科目	日本語 II A
担当教官	渡部浩見
目 標	初級クラスで学習した基礎的な語彙・文型・表現の定着をはかるとともに、語彙力を高め、豊かな表現力を身に付けさせる。加えて種々の場面に応じた実用的な日本語能力を習得させる。
内 容	短文を中心に構成され、会話を多く取り入れた教材を用い、場面に応じた適切な表現を学びながら、既習の語彙・文型・表現の応用練習を行う。併せて新出の語彙・文型・表現を口頭練習、書く練習によって学習し、より日本語らしい表現の習得を目指す。
テキスト	コンパクトジャパニーズ 2

レベル 5

授業科目	日本語 V A
担当教官	山中康子
目 標	慣用的表現や上級文法を習得させることによって日本語の読解力、文章表現力を高めさせる。また、時事日本語の聴解力も養わせる。
内 容	主として新聞の記事から題材をとり、漢字の読み書き、慣用句、文法などの問題点をテキストとしてまとめたものを用いる。授業では、まず読んで理解し、次にそれに対する自分の意見をまとめて発表し、討論へと発展させる。また、ニュースなどを聞くことにより、聴解力を養い、文章表現との違いを理解する。
テキスト	自主教材

日本語研修コース

深見兼孝

【修了者】

第二十六期（1998年4月～98年9月）（18名）

氏名	呼び名	出身国	生年	専攻	専門教育
Angara, Eusebio Villar	エウセビオ	フィリピン	1963	環境生物学	広島大学
Almonte, Sherlyne Alcantara	シェルリン	フィリピン	1970	教育学	〃
Buckley, Geraldine Marcella	ジェラルディン	オーストラリア	1970	日本文化学	〃
De Costa, Devika Malkanthi	デビカ	スリランカ	1964	生物学	〃
Niken Satuti Nur Handayani	ニケン	インドネシア	1965	生物学	〃
Gerashchenko, Bogdan Ivanovich	ボグダン	ウクライナ	1963	医学	〃
Tchong, Kong Ming	チョン	マレーシア	1973	環境工学	〃
Mikrajuddin Abdullah	ミクラジュディン	インドネシア	1968	物理学	〃
Mkwawa, Is-Haka Musa	イサカ	タンザニア	1970	電子工学	〃
Parveen, Surtana	パルビーン	バングラデシュ	1966	農学	〃
Memon, Mushtaq Ahmed	ムシュタク	パキスタン	1966	経済学	〃
Mendoza, Rizalyn Junio	リザリン	フィリピン	1967	教育方法学	〃
Recio Bucardo, Juan Carlos	ファンカルロス	コスタ・リカ	1965	国際協力学	〃
Kyaw Thet	キョーテツ	ミャンマー	1965	機械工学	山口大学
Makochekanwa, Casten	カステン	ジンバブエ	1972	物理学	〃
Salas, Carlos Roberto	カルロス	メキシコ	1966	国際経済学	〃
Ogahara Sajazar, Miguel Jiro	ジロー	ボリビア	1972	国際関係学	〃
Arudchelvan, Yamini	ヤミニ	スリランカ	1964	歯学	〃

【修了者】

第二十七期 (1998年10月～99年3月) (38名)

氏 名	呼び名	出身国	生年	専 攻	専門教育
Ng, Chia Chia	ングチアチア	マレーシア	1972	宗 教 学	広島大学
Rodiyati, Azrianingsih	ロディヤティ	インドネシア	1970	生 物 学	〃
Lotfi, Mostafa	ムスタファ	モ ロ ッ コ	1967	地 学	〃
Gravoso, Rotacio Sabong	ロ タ シ オ	フィリピン	1965	教 育 方 法 学	〃
Chhinh, Sitha	シ タ	カンボジア	1972	教 育 学	〃
Dy, Sideth Sam	シ デ ッ ト	カンボジア	1972	教 育 学	〃
Ly, Chi Vinh	リチヴィン	オーストラリア	1976	地 球 物 理 学	〃
Tebbs, Duncan Ian	ダンカン	イギリス	1977	数 学	〃
Georgescu, Valeriu Paul	パ ウ ル	ルーマニア	1971	数 学	〃
Petrov, Laura Oana	ラ ウ ラ	ルーマニア	1970	生 物 学	〃
Boulenuar, Abdellah	ア ブ デ ラ	モ ロ ッ コ	1972	電 子 工 学	〃
Castillo, Juan Rufino	カスティージョ	ドミニカ	1970	土 木 建 築 学	〃
Nagylaki, Zoltan	ゾ ル タ ン	ハンガリー	1973	数 学	〃
Chowdhury, Vishwajit Sur	ス ル	バングラデシュ	1972	生 物 学	〃
Win Min Khine	ウィンミンカイン	ミャンマー	1967	国 際 関 係 学	〃
Mikhailova, Elena Alexeyevna	エ レ ナ	ロ シ ア	1966	国 際 関 係 学	〃
Sultana, Tanvira Afroze	タンヴィラ	バングラデシュ	1973	医 学	〃
Vannaphachone, Songphone	ソ ン ボ ン	ラ オ ス	1963	日 本 文 学	山口大学
Milton, Elliot	エリオット	アイルランド	1974	近 世 史 学	〃
Chipilova, Anna Viktorovna	ア ン ナ	ロ シ ア	1976	日 本 語 教 育	〃
Dubeissy, Rana Nadim	ラ ナ	レバノン	1974	建 築 工 学	〃
Horvath, Geza	ゲ ー ザ	ハンガリー	1972	数 理 ・ 情 報 科 学	〃
Rizkiyev, Farrukh Hairullayevich	ファルーク	ウズベキスタン	1976	電 子 工 学	〃
Mtango, Namodori Rachel	ナムドリ	タンザニア	1969	獣 医 畜 産 学	〃
Sripuksachard, Sittirat	シッティラット	タ イ	1964	教員研修留学生	島根大学
Naim, Ali	ア リ	ブルネイ	1968	教員研修留学生	〃
Alonso, Lujano Fausto Humberto	ア ロ ン ソ	メ キ シ コ	1968	教員研修留学生	〃
Arrieta, Gutierrez Judith	フディット	メ キ シ コ	1967	教員研修留学生	〃
Nethanomsak, Teerachai	ティーラチャイ	タ イ	1969	教員研修留学生	高知大学
Jia, Yameng (贾 亚萌)	ジ ア	中 国	1968	教員研修留学生	〃
Boonphadung, Suttipong	スッティポン	タ イ	1968	数 学	広島大学
Bamrongjitt, Petay	ベ タ イ	タ イ	1966	数 学 教 育	〃
Nur'aini, Agung Wijaya	ア イ ニ	インドネシア	1970	障 害 児 教 育	〃
Cha, Seong Uk (車 聖旭)	チ ャ	韓 国	1965	教 育 経 営	〃
Kim, Jong In (金 鍾仁)	キ ム	韓 国	1965	科 学 教 育	〃
Chi, Jie (迟杰)	チ	中 国	1955	教 育 行 政 学	〃
Nicolas, Mora Rosa Maria	ロサマリア	メ キ シ コ	1968	障 害 児 教 育	〃
Danila, Olivia Magdalena	マ グ ダ	ルーマニア	1969	地 理 学	〃

第26期日本語研修コース（1998年度前期）予定表

期 日	行事／試験等	特別研究指導	備 考
4 / 15～4 / 17	4 / 15(水) 11:00 開講式 (午後) クラス・ミーティング		4 / 15(水) 11:30 ホストファミリー案内 4 / 17(金) 17:00 インターナショナルティータイム 4 / 19(日) 東広島市 オリエンテーション・バスツアー
4 / 20～4 / 24		4 / 24(金) 広島市	4 / 24(金) 4:30 ホストファミリー対面会
4 / 27～5 / 1	4 / 29(水) 公休日		
5 / 4～5 / 8	5 / 4(月) 公休日 5 / 5(火) 公休日		
5 / 11～5 / 15		5 / 15(金) 宮島	
5 / 18～5 / 22	5 / 19(火) 第1回試験		
5 / 25～5 / 29			
6 / 1～6 / 5	6 / 4(木) 「専門用語」開始		
6 / 8～6 / 12			
6 / 15～6 / 19			6 / 20・21(土・日) バスツアー
6 / 22～6 / 26	6 / 25(水) 第2回試験		
6 / 29～7 / 3			
7 / 6～7 / 10			7 / 11(土) スポーツ大会
7 / 13～7 / 17			7 / 17(金) インターナショナルティータイム
7 / 20～7 / 24	7 / 20(月) 公休日 7 / 23(木) 第3回試験		
7 / 27～7 / 31			
8 / 1～9 / 3	夏 期 休 業		
9 / 4			
9 / 7～9 / 11	9 / 8(火) 第4回試験 9 / 9・10(水・木) 特別講義 9 / 11(金) 13:00 成果発表 15:00 修了式		

第27期日本語研修コース（1998年度後期）予定表

期 日	行事／試験等	特別研究指導	備 考
10／9	10／9(金) 13：20 オリエンテーション		
10／14～10／16	10／14(木) 11：00 開講式 13：20 クラスミーティング		10／14(木) 11：30 ホストファミリー案内 10／17(土) 東広島市 オリエンテーション・バスツアー
10／19～10／23		10／23(金)～10／25(日) ビッグ・ジャンボリー	
10／26～10／30		10／30(金) 広島市	10／30(金) ホスト・ファミリー対面式
11／2～11／6	11／3(火) 公休日 11／5(木) 創立記念日		
11／9～11／13			11／10(火) 健康診断 11／13(金) インターナショナル・ティータイム 11／14(土) スポーツ大会
11／16～11／20	11／19(木) 第1回目試験	11／20(金) 宮島	
11／23～11／27	11／23(月) 公休日		
11／30～12／4	12／3(木) 専門用語開設開始		
12／7～12／11			
12／14～12／18	12／22(火) 第2回目試験		
12／21～12／23	12／23(木) 公休日		
12／24～1／7	冬 休 み		
1／8			
1／11～1／15	1／15(金) 公休日		
1／18～1／22			
1／25～1／29			
2／1～2／5	2／2(火) 第3回目試験		
2／8～2／12	2／11(木) 公休日	2／12(金) マツダ	
2／15～2／19			
2／22～2／26	2／25(木) 第4回目試験		
3／1～3／3	3／1・2(月・火) 特別講義 3／3(木)13：00 成果発表 15：00 修了式		

日本語研修コース関係講師一覧

第二十六期 (1998年4月～98年9月)

専任	多和田 眞一郎	浮田 三郎	中川 正弘	玉岡 賀津雄
	深見 兼孝	橋本 敬司		
非常勤	今石 正人	岡田 千也子	茅本 百合子	橘 孝司
	松尾 馨	山中 康子		

専門用語解説

総合科学部－中越信和／教育学部－二宮 皓、水島裕雅／経済学部－佐野進策、石田三樹／理学部－吉田和夫、細谷浩史／歯学部－吉野 宏／工学部－久保川淳司、福島博／生物生産学部－山尾政博、田中秀樹、阿部秀樹／国際協力研究科－松岡俊二、中山修一、マハラジャン・ケジャブ・ラル

第二十七期 (1998年10月～99年3月)

専任	多和田 眞一郎	浮田 三郎	中川 正弘	玉岡 賀津雄
	深見 兼孝	橋本 敬司		
非常勤	今石 正人	茅本 百合子	熊野 七絵	橘 孝司
	中園 博美	山中 康子		

専門用語解説

総合科学部－柳澤浩哉、原 正幸、根平邦人、藤原祺多夫／文学部－頼 祺一／教育学部－二宮 皓、曾余田浩史、由井義通、丸尾 修、マンザーノ・バリリオ・ウマンガイ、深田博己、迫田久美子、森 敏昭／学校教育学部－三宅紹宣、植田敦三、田中春彦、柴 一実、山崎敬人、岩元澄男、船津守久、山梨正雄、林 孝／理学部－大春慎之助、久保 泉、日高 洋、近藤勝彦／工学部－久保川淳司、福島博／生物生産学部－松田治男／国際協力研究科－吉村幸則、松尾雅嗣、吉田修／原爆放射能医学研究所－木村昭郎

日本語・日本文化研修プログラム

橋 本 敬 司

広島大学では、昭和60年度より日本語・日本文化研修留学生を受け入れている。昭和62年度からは、特別経費の交付を受け、「日本語・日本文化研修プログラム」を開始し、現在に至っている。このプログラムは、日本語研修（「日本語・日本事情」で開設されているクラスから選択）、指導教官のもとでの課題研究、日本文化特別講義・見学プログラムから構成されている。平成9年度後期および、平成10年度前期に実施された日本文化特別講義・見学プログラムは、以下の通りである。

なお、研修生は研修の終わりに研修成果をレポートにまとめ、指導教官と留学生センターに提出することになっている。留学生センターではそれらのレポートをまとめ、レポート集として刊行する。

平成9年度後期

- 10月10日（土）－11日（日） 高田郡高宮町ホームステイ
- 10月15日（水） 開講式・オリエンテーション
- 10月18日（土）－19日（日） 似島キャンプ
- 10月25日（土） 東広島市バスツアー
- 11月8日（土） スポーツ大会（ソフトバレーボール）
- 11月14日（金） 宮島見学
- 2月6日（金） マツダ見学
- 2月7日（土） 和太鼓講演及び講習
- 2月23日（月）－24日 スキー実習

平成10年度前期

- 4月17日（金） オリエンテーション
- 7月10日（金） 講義「結婚・離婚と日本の家族」小川富之（広島経済大学）
- 9月10日（金） 修了式

留学生指導部門： 「対処」型の支援活動から 「予防」型の交流活動への転換

玉岡 賀津雄

はじめに

広島大学で学ぶ留学生の平均年齢は、日本人の学部生および大学院生の平均年齢よりもかなり高く、また勉学のみならず多様な就労経験を持つ留学生も少なくない。そこで、「成熟した大人」としての留学生に対する指導・助言を考えると、活動の意識および制度上の転換が必要ではないかと思われる。また、広島大学留学生センターは、平成2年6月に設立されて以来、留学生受け入れに関する経験がじゅうぶん蓄積され、留学生に起こりうる問題を予測して対応することができるようになってきた。そこで、これまでの臨床・相談を中心とした「対処」型の支援活動から、危機管理を念頭においた「予防」型の交流活動へと方針を転換するよう活動を進めている。1998年度(平成10年度)は、その第一歩であった。以下、本年度の活動を、項目別に短く要約した。

1. 国際交流ボランティア制度の設立

1998年度において、留学生に対する指導・助言活動の要となったのは、国際交流ボランティア制度の設立であった。1998年6月12日、広島大学留学生センター運営委員会の承認を得て、広島大学留学生センター主導の国際交流ボランティア事業を開始した。留学生に対する「一方向」の援助活動から、留学生と日本人学生(大学院生および研究生を含む)の「双方向」の交流活動への発想の転換を想定して、留学生と日本人学生の交流を促進するための制度を設立した。ボランティア登録者数は、1999年2月26日現在で128名である。

2. ボランティア希望者への面接の実施

ボランティアの希望者には、「広島大学国際交流ボランティア申し込み用紙」に記入して、留学生センターに直接提出してもらった。そして、希望者に対して個別に4人の留学生センター教官が面接を行った。原則としてすべてのボランティア希望者を登録する

のではあるが、面接によって、どのような背景を持った学生であるかを確認することが目的であった。また、面接を行った教官は面談記録を取った。そこには、これまでのボランティア活動の経験、ボランティア活動に参加できる時間的余裕、応募者の異文化体験、英語や中国語などの会話能力、異文化状況での適性、性格的な明るさ、コミュニケーション能力を、かなり主観的ではあるが、記入するようにした。振り返ってみると、100名以上の面接は確かに時間のかかる作業ではあったが、ボランティアを希望する学生に接触し、どういう背景を持つボランティア応募者が居て、またどのような活動を欲しているかを把握することができ、貴重な情報を得ることができた。

3. 国際交流ボランティア手帳の作成と配布

さらに、ボランティア登録者には、「国際交流ボランティア手帳」を配布することにした。手帳には、登録者自身の写真を貼って、留学生センター長の名前で、ボランティア登録者であることを証明するようにした。さらに、実際に行ったボランティア活動の内容と活動期間を記録して、留学生センターの活動責任者の署名・捺印のもとに、ボランティア活動を行ったことを証明できるようにした。もちろん、これは、ボランティア活動を行う主要な目的であってはならないが、ボランティア活動の証明として就職の際にも使えるように配慮した。

4. 国際交流ボランティア登録者のデータ・ベースの作成

応募用紙を提出して面接を受けた学生を、ボランティア登録者として、データ・ベースに全員入力し、登録した。ボランティアの募集は、年度ごとに行うことにした。したがって、今回は、発足年度である1998年度の登録が行われた。もちろん、今年度は発足が6月12日であったため、募集がそれ以降となった。しかし、来年度(即ち、1999年度)からは4月に募集を行い、データ・ベースを更新することができるであろう。

5. データベースの管理体制の確立

近年、データ・ベースの漏洩や乱用が問題となっている。データ・ベースには、国際交流ボランティアに登録した個々人の性別、年齢、電話、Eメール、住所、所属などプライベートな情報が多い。ボランティア登録は、あくまで広島大学の国際交流ボランティアとしての登録であり、他の団体や個人に情報が漏れることを避けるためにデータ・ベースの管理を徹底した。データ・ベースに記録された情報は、留学生センターが管理する。

その方法として、まず、バックアップ以外の目的でデータ・ベースのコピーを印刷でもフロッピーでも取らないことにした。活動上の連絡のために、特定の活動に参加するボランティア登録者に関する最小限の情報に限定してプリンターで印刷し、留学生センターの教官だけがそれを使用することにした。また、情報の流出を避けるために、国際交流ボランティアのデータ・ベースは、コンピュータ1台に保存し、その1台のみを使用した。さらに、そのコンピュータへのアクセスを留学生センターの教官1名だけに絞った。以上の方法によって、データ・ベースの情報が、適切に管理されている。

6. Eメールによる連絡網

国際交流ボランティア登録者への連絡は、Eメールを活用することにした。国際交流ボランティア専用のEメール・アドレスを新しく設置した。そして、例えばスポーツ大会であれば、その趣旨の内容をEメールで全ボランティア登録者に流して、その後で希望者がEメールで自分達の興味や都合により、所定の期日までに参加の意志表示をやはりEメールで行うようにした。その後、参加可能なボランティア学生が特定の日に集まって、企画や運営のための話し合いをすることにした。

7. 多言語対応の留学生支援体制の開始

国際交流ボランティア制度の発足により、英語、フランス語、ドイツ語、中国語、韓国語などの通訳ができるボランティア学生への連絡が容易になった。データ・ベースから打ち出された各言語に堪能な学生に、直接電話で連絡して協力をお願いした。とりわけ、日本語がまだ十分でなく、英語も話せないという中国からの留学生がいたので、中国語の通訳は必須であった。また、日本語も英語もあまりできない留学生が交通事故や交通違反を起こし、フランス語で対応する必要性が生じた際にも、国際交流ボランティアとして登録していた学生が、警察署での通訳や、事故の示談に立ち会ったりしてくれた。まだ対応できる言語数は少なく、人数にも限りがあるものの、多言語対応の留学生支援体制ができた。

8. 日本語研修生および教員研修生のための新しいチューター制度

新しく広島大学にやってくる日本語研修生や教員研修生を、生活および学業面でサポートすることを目的として、チューターを紹介してきた。国際交流ボランティアができていなかった1998年4月の時点では、留学生には、教官および学生チューター7名が

20名以上の留学生に対応していた。その後、国際交流ボランティア制度ができ、1998年10月に来日した留学生には、あらかじめEメールでチューター希望者を募集し、留学生の年齢、性別、専門などに配慮しつつ、適当と思われるボランティア学生を選んだ。10月に来た留学生については、日本語研修および教員研修のための留学生39名に対して20名をあてた。これによって、国際交流に対して動機付けの強いチューターを多数見つけることができ、余裕のある日常的な交流活動ができるようになった。これにより、留学生が孤独で精神的に落ち込んでしまうことが少なくなり、心理的な支援ができるようになることを期待している。

9. 日本語・日本文化プログラムのためのチューター制度の開始

これまで日本語・日本文化プログラムの留学生は、日本語がある程度できるということで、チューターをつけたり、また特に歓迎会をすることはなかった。しかし、国際交流ボランティア制度ができたことで、ボランティア希望者を募り、新しい交流活動を開始することができた。具体的には、日本語・日本文化の留学生12名のために14名のボランティアのチューターをあてた。これは、留学生1人に本学学生1名あるいはそれ以上をあてて、日常的な交流活動を展開しようという意図であった。さっそく10月10日(土)には歓迎会および西条酒祭りへの参加など、活発な国際交流活動を展開した。その後も、留学生と日本人学生の日常的な交流活動が行われている。

10. インターナショナル・ティータイムとその新しい展開

インターナショナル・ティータイムは、留学生センター設立以来、継続して実施されている国際交流活動である。1998年度は、東広島キャンパスで3回、霞キャンパスで4回、実施した。この行事は、大学の敷地内で立食パーティーを行うものである。参加費は無料で、学生のみならず学内の関係者、家族も参加できる。また、国際交流ボランティア制度を有効に活用するため、これまで行ってきたインターナショナル・ティータイムに文化紹介の企画を加えることにした。1998年11月13日(金)に行われたものを例に挙げると、10月上旬にEメールで希望者を募ったところ、14名のボランティア希望者がEメールで、あるいは直接申し出てきた。10月29日(木)に、留学生とボランティア学生とのミーティングを持ち、留学生と日本人学生とで6グループを作り、インターナショナル・ティータイムの文化紹介の準備をすることになった。単に、企画を成功させることのみを目的にするのではなく、そのプロセスで留学生と日本人学生と一緒に企画し、準備して、何かを行うことによる国際理解を促進していくことをより重要な目的であると考え

て、何かを行うことによる国際理解を促進していくことをより重要な目的であると考えた。いったんグループの活動が始まると、留学生センターの教官は、筆記用具など必要なものを提供する程度で、国際交流の活動自体にはあまり口を挟まないようにした。その結果、今回11月13日に行われたインターナショナル・ティータイムでは、ステージでの7種類の文化紹介ばかりでなく、各国のポスターの展示、ビデオの上映などボランティア学生主体によるさまざまな内容の活動が展開された。

また、1997年5月以来、インターナショナル・ティータイムは、学生のクラブ活動である広島大学国際交友会（I.A.H.U.）と広島大学留学生センターの共催というかたちで、企画や準備を行ってきた。I.A.H.U.の会員であり、なおかつ国際交流ボランティアに登録した学生も多く、広島大学留学生センターの国際交流活動は、I.A.H.U.の経験と実績に負うところが大きいことを、ここに加えておきたい。

11. スポーツ大会の企画・準備へのボランティア学生の参加

国際交流ボランティアの学生が中心になり、ソフト・バレーボール大会の企画・準備を行った。また、国際交流ボランティアのために打ち上げ会も行い、留学生とそれにかかわる日本人学生との交流も深めることができた。

12. 国際交流ボランティア・セミナー

1998年12月12日（土）に第1回目の国際交流ボランティア・セミナーを行った。ボランティア活動を長く広島地区で行ってこられた鈴峯女子短期大学の菅井直也助教授を講師としてお迎えし、ボランティアの定義、意義、活動、企画などについて講演していただいた。また、アメリカ、ドイツ、中国に留学した経験のある広島大学の日本人学生3名と韓国からの留学生1名が留学経験を報告し、異文化体験から国際交流ボランティアの意義や活動のあり方を議論した。

1999年2月26日（金）には第2回セミナー「異文化適応と文化交流について考える」を催した。武蔵大学の白水繁彦教授をお迎えし、「異文化間普及におけるメディアやリーダーの役割」という題目で御講演いただいた。また国際交流基金日本語国際センターの八田直美先生には「国際交流基金日本語国際センターと津田塾大学における実践報告－日本語教育におけるネットワークの可能性を考える－」という題目でお話しいただいた。そして、広島大学国際交流ボランティアの半年間の活動を振り返り、今後について考えるための活動報告会を行った。ここでは、各種活動の従事者数名が活動内容や方法について報告すると同時に、その活動から学んだことなども発表し、非常に有意義な時間が

今後も国際交流ボランティア制度が、単なる留学生支援のみでなく、個々のボランティア参加者も意義を見いだせる、双方向の対等な交流活動となるようにしたい。

13. 外国人留学生懇親会の企画

1998年12月17日(木)には、広島大学の学長が主催する外国人留学生懇親会に、留学生と16名の国際交流ボランティアが参加して、パーティーの各種活動を、企画、準備、実施した。参加者は、広島大学の教職員、留学生、学生ばかりではなく、広島市や東広島市の関係者を含む800名におよぶ大規模な懇親会であった。留学生と日本人学生とが自分たちの手で築き上げた、素晴らしい国際交流活動の結実であった。

14. 短期研修プログラムの日本語会話パートナー紹介の確立

国際交流ボランティアに登録した103名(1998年の11月時点)の内、日本語会話パートナーを希望するボランティアは90名になった。この内から、希望を取って、短期研修プログラムの留学生のために日本語会話パートナーを紹介した。これは始まったばかりである。

15. 留学生を対象とした授業の担当

1998年4月以前には、留学生センターの指導部門の教官は、授業を担当していなかった。しかし、留学生との接点を持つことを目的として、前期と後期に渡って、専任の教官2名(助教授と講師)が、全学の日本語上級レベルの留学生を対象とした日本語・日本事情の授業をそれぞれ1科目担当することにした。また、専任の教官1名(助教授)は、日本語研修生を対象とした「日本文化適応」と題した授業を英語で行った。確かに指導部門の負担は大きくなったが、教室でも留学生と接する機会が得られたことは、留学生の実情を理解する上でも意味のあることである。

16. 留学生カウンセリング業務の継続

今年度も留学生の相談業務を行った。688名の留学生(1998年11月1日現在)が在学している以上、心理的悩みを持つ留学生が後を絶たない。そこで、留学生指導の大枠の方針は変更したものの、学業・研究・生活などの面で心理的な困難を訴える留学生に対応するために心理相談を行った。相談員は、わずか2名で非常勤であるが、かなり長い時

するために心理相談を行った。相談員は、わずか2名で非常勤であるが、かなり長い時間をかけて対応している。1997年度からは、霞キャンパスにおいても留学生相談室を設け、留学生相談を実施している。また、重度の症状および長期におよぶ留学生に対応するために、保健管理センターとも協力してカウンセリングを行っている。

17. 東広島市で新しく生活を始める留学生のためのオリエンテーション

東広島市で新しく生活を始めるための手続き（外国人登録、保健など）や生活上の問題（病院、交通、買い物など）を支援するためのオリエンテーションを行ってきた。1998年度は、4月と10月から新しく広島大学へ来た留学生のためのオリエンテーションを行った。特に、10月の東広島市バスツアーでは、国際交流ボランティアの学生が英語と中国語の通訳として参加してくれ、多言語対応が可能になった。

18. 性犯罪防止対策オリエンテーション

日本が必ずしも安全な場所ではなく、時には性犯罪に遭遇することもあることを留学生に説明した。性犯罪の被害に合わない対策および仮に遭遇した場合の対処方法について、西条警察から講師2名に来ていただき、講義および実演をしていただいた。

19. Sex Crime Prevention Strategies（性犯罪防止対策）のパンフレット作成および日英対訳版の防犯パンフレットの作成

性犯罪防止対策オリエンテーションのために、日本での犯罪率紹介さらに性犯罪防止対策を記述したパンフレット（3ページの短いもの）を英文で作成・印刷・配布した。さらに、これをより充実したものにするために、日本語と英語の対応版の犯罪防止パンフレットを作成中である。

20. ホームステイのプログラムの企画および実施

学外のホームステイ団体と連絡を取って、留学生にホストファミリーを紹介する業務を今年度も行った。また、留学生とホストファミリーのための交流会を設定して、お互いに紹介する場を作った。

21. ビッグ・ジャンボリー'98の江田島「青年の家」での合宿

ビッグ・ジャンボリー'98と題して、広島市青少年センターおよび江田島「青年の家」の共催で、日本人と留学生の交流を2泊3日で江田島「青年の家」で行った。広島大学留学生センターからは、43名の留学生が参加した。餅つき大会、スポーツ、竹細工、ゲーム、料理など、2日間に渡りいろいろな活動を留学生と一般の日本人参加者で行った。広島大学以外の多様な人達との出会いがあり、留学生の日本文化理解に大きく貢献したはずである。

22. 広島大学留学生センターを紹介したパンフレットの作成

広島大学留学生センターを紹介したパンフレットを作成した。これは、教官の構成など、従来のパンフレットの情報が随分変わっており、新しい情報を記載したものである。

23. 広島大学留学生キャンパスライフ・ガイド中国語版の完成

留学生に対して初期情報・必須情報のゆきわたりが不十分であるため、混乱が生じたり行動が制限されているとの認識に基づき、留学生活のための総合情報冊子、「広島大学留学生キャンパスライフ・ガイド」を刊行している。現在、学内の各留学生に日本語版と英語版一冊ずつが配られているほか、各部局事務局や、上記協議会委員のもとにも配られている。今年度は、中国語版が完成した。

24. 法定伝染病への対処

留学生センターが設立されて初めて、法定伝染病が発生した。感染した留学生は、東広島から広島市へ搬送され、隔離病院に入院した。また、広島県東広島保健所へ、感染した留学生と接触のあった方々のリストを提出した。その後、問診および検査が行われ、保健所主導で留学生の居住していた部屋の消毒が行われた。また、医療費は、国保と協会医療補助でほぼまかなわれた。退院後は、この留学生のために日本語の特別講義が編成された。

25. 「ボランティア・ネットワーキング」講演討論会の開催

1999年2月5日と6日の両日にわたって、「ボランティア・ネットワーキング」と題し

て、講演討論会を行った。留学生教育、外国人支援、日本語教育、相談指導におけるネットワークの現状、なかでもボランティア・ネットワークがどう機能しているかについて5人の方に講演していただいた。大学内にとどまらず、さまざまなネットワークの実際について学ぶことができた。また、ネットワークの問題点や今後の課題についても活発な意見交換がなされた。

26. 広島地域留学生会の組織化

広島県が国際交流のモデル地域に選ばれたのを期に、広島地域留學生団体育成支援協議会が、広島県の大学、短期大学、高等専門学校、内外教育センターなどのメンバーで構成された。同協議会の推進事業の一つとして、大学単位ではなく、広島地域単位の広島地域留学生会の設立を目指して、組織作りを行っている。また、留学生会を設立するための研修会を宮島総合福祉センターで1999年3月5日から6日にわたって行った。留学生、協議会メンバー、留学生支援団体などから40名ほどの参加者で実施した。この研修会では、留学生が求める会の設立およびその支援体制について意見交換が行われた。

27. 広島地域留学生の生活および留学生会についての意識調査の実施

広島地域留學生団体育成支援協議会は、広島地域の大学に在籍する留学生を対象として、アンケート調査を実施した。これは、広島地域留学生会を設立するにあたって、現在活動している国際交流団体について、アルバイト、大学での学習および研究、宿舎の状況についての現状を明らかにすることを目的としている。

28. 広島地域の留学生のための情報パンフレットの作成

留学生が広島地域の大学で学習・研究するにあたって必要であろうと思われる情報をまとめたパンフレットを3種類用意した。まず、第1に、広島県の大学が所在する都市の紹介を行ったパンフレットを作成した。これには、県や都市の簡単な紹介とともに、インターネットのアドレスを掲載して、各人が必要とする詳細な情報を入手できるようにした。第2に、広島地域で留学生を受け入れている大学・短期大学・高等専門学校の情報を含んだパンフレットを作成した。単にこれらの機関の情報のみではなく、留学生との国際交流活動の状況なども大学ごとに紹介した。第3に、広島地域で生活するために必要な経費、宿舎の探し方など実生活に関する情報を含んだパンフレットを作成した。以上の、3種類のパンフレットを作成して、留学生のためにこれらの情報が提供できる

ようにした。

29. 保証人を無くす制度

広島地域に生活する留学生にとって、最初の難関は、保証人の確保である。これは、日本の習慣であり、保証人を確保することは日本人学生でもなかなか難しい場合さえある。日本に家族や親戚のいない留学生にとって、保証人を探すことは非常に難しい。留学生の保証人になることを拒む指導教官さえいる状況である。そこで、広島地域では、少なくとも宿舎を借りるのに保証人を必要としない制度をつくるように活動を展開してきた。そのために、不動産関係者および家主さんに対して説明会を行った。数件ではあるが、保証人がなくても留学生に宿舎を貸そうという家主さんがでてきた。

おわりに

本年度は、これまでの「対処」型の支援活動から、危機管理を念頭においた「予防」型の交流活動へと方針を転換することを掲げて出発した。まず、国際交流ボランティア制度を設立することによって、留学生が日常的に日本人学生と交流できるような状況を作った。国際交流ボランティアの活用によって、チューター（ここで言うチューターとは、無償のボランティア・チューターのことを指す）および日本語会話パートナーの絶対数を大幅に増やした。これによって、これまで手薄であった日本語・日本文化プログラムの留学生にまで、広くチューターが行き届いた。また、オリエンテーション、スポーツ大会、パーティーなどにボランティア学生が企画から参加することで、留学生との交流をより継続的なものにできた。このように、日常的な国際交流活動を展開することで、留学生が危機的状況に陥ることを予防できるのではないかと期待している。

留学生センター講演討論会

金 田 智 子

1999年2月5・6日両日にわたって、「ボランティア・ネットワーキング」と題して講演討論会を行った。留学生教育、外国人支援、日本語教育、相談指導におけるネットワークの現状、なかでもボランティア・ネットワークがどう機能しているのか、について五人の方に御講演いただいた。大学内にとどまらないさまざまなネットワークの実際について学ぶことができたと同時に、問題点や今後の課題についても活発な意見交換がなされた。尚、詳細は報告書に譲り、以下、講演討論会のプログラムと参加者名簿のみ掲載する。

プログラム

テーマ：「ボランティア・ネットワーキング」

2月5日（金） 10時～17時（広島大学 学校教育学部大会議室）

<午前の部> 司会：長谷川伸次、橋本敬司（広島大学留学生センター）

10：00-10：05 広島大学留学生センター長 多和田眞一郎 挨拶

10：05-10：55 「留学生交流ネットワークにおける危機管理のケーススタディ」

加藤 清方（東京学芸大学留学生センター）

10：55-11：05 休憩

11：05-11：55 「ボランティア教育を考える－異文化トレーニング合宿の試み－」

庄司 恵雄（岡山大学留学生センター）

11：55-13：30 昼食

<午後の部> 司会：浮田三郎、玉岡賀津雄（広島大学留学生センター）

13：30-14：20 「多文化化する地域の交流・学習のネットワーキングについて」

春原憲一郎（財海外技術者研修協会東京研修センター）

14：20-14：30 休憩

14：30-15：20 「名古屋大学の留学生をとりまくボランティアネットワーク

－日本人学生の視点から－

堀江 未来（名古屋大学留学生センター）

15：20-15：30 休憩

15：30-16：20 「留学生への心理的支援とボランティア・ネットワーク」

高松 里（九州大学留学生センター）

16：20-17：00 総括討議

2月6日（土） 10時～12時

司会：多和田眞一郎（広島大学留学生センター）

10：00-12：00 全体討論「ボランティア・ネットワーク作りの展望」

講演討論会参加者

北海道大学留学生センター	米 山 道 男
新潟大学留学生センター	土 屋 千 尋
筑波大学留学生センター	吉 田 友 彦
財団法人海外技術者研修協会	春 原 憲一郎
東京大学留学生センター	重松スティーブン
東京学芸大学留学生センター	加 藤 清 方
東京学芸大学留学生センター	任都栗 新
東京外国語大学留学生日本語教育センター	松 井 信 行
東京農工大学留学生センター	田 崎 敦 子
電気通信大学留学生センター	鈴 木 雅 久
千葉大学留学生センター	見 城 悌 治
埼玉大学留学生センター	山 本 一 男
名古屋大学留学生センター	堀 江 未 来
岐阜大学留学生センター	太 田 孝 子
三重大学教育学部	三 井 豊 子
大阪大学留学生センター	西 口 光 一
大阪外国語大学留学生日本語教育センター	山 本 進
京都大学留学生センター	大 東 祥 孝
金沢大学留学生センター	八重澤 美知子
神戸大学留学生センター	河 合 成 雄
岡山大学留学生センター	庄 司 恵 雄
九州大学留学生センター	高 松 里
長崎大学留学生センター	松 本 久美子
熊本大学留学生センター	佐々木 陽 子
琉球大学留学生センター	佐々木 香代子
広島大学法学部	八 木 玲 子

広島大学学校教育学部
広島大学保健管理センター
広島大学留学生センター
広島大学留学生センター
広島大学留学生センター
広島大学留学生センター
広島大学留学生センター
広島大学留学生センター
広島大学留学生センター
広島大学留学生センター
広島大学留学生センター
広島大学留学生センター
広島大学留学生センター

朝倉 淳
大下 晶子
多和田 眞一郎
浮田 三郎
長谷川 伸次
中川 正弘
玉岡 賀津雄
深見 兼孝
田村 泰男
橋本 敬司
金田 智子
太田 啓子
佐々木 京子

教育交流部門：広島大学短期交換留学 (HUSA)プログラム

堀 田 泰 司

広島大学短期交換留学プログラムは、短期留学推進制度の一環として、特に日米文化教育交流会議（カルコン）においてジュニア・イヤー・アブロード・プログラムによる留学生の受け入れを積極的に推進するよう勧告されていることもあり、アメリカ合衆国を主たる対象国としながらカナダ、オーストラリア、マレーシア、その他ヨーロッパ諸国の大学（短期学生交流協定校）に在籍する学部学生で、本学に一学期若しくは一学年度の短期間留学を希望する者を対象とするもので、特別に「英語による授業科目」を開設することによって、本学で教育を受ける機会を提供し、もって学生交流を活性化させ、本学の一層の国際化に資することを目的とするものである。そのために特に本学では、総合科学と言う観点から特色ある専門的科目や日本・アジア理解を推進する専門的科目を提供し、将来日本やアジアの事情に通じた人材の育成に貢献するとともに、本学の学生の国際感覚の養成と海外留学を活性化することが出来るようなプログラムを提供する。

HUSAプログラムは、その実施委員会によって統轄されており、委員会は、合計20名の各学部代表委員並びにその他委員により構成されている。但し、実務的な管理運営に関しては、留学生センターの教育交流部門並びに留学生課がその主たる業務を担っている。また、受け入れ学生に対する授業科目は、各学部が独自に開講している。

I. 受け入れプログラムの概要

- ① 受け入れ期間： 一学期又は、一学年
- ② 募集人員： 30名
- ③ 募集方法： 学生交流協定を締結している（締結する）各国の大学に対し募集要項を配布し、公募する。
- ④ 応募資格：(1) アメリカ合衆国を主としたアジア・太平洋地域の大学の学部学生であること
(2) 本学との間に学生交流協定を締結している大学の学生または学生交流について双方が合意した書簡がある大学の学生
(3) 原則として自国の大学の正規課程3年次の学部学生
(4) 学業成績が優秀で日本留学に熱意を持つ者

(5) 非英語圏から応募する学生にとっては英語による授業を履修できるのに必要な英語力を持つ者

⑤ 選考方法：別途設置する選考委員会において書類選考する。

⑥ 学生の身分と受け入れ方法：学生は、留学生センターで総括しながら、それぞれ専門に応じて本学の指導教官を定め、各学部で「特別聴講学生」（広島大学学生交流規程）として受け入れる。

⑦ 授業料等の不徴収：交流協定に基づく、特別聴講学生として受け入れるので、授業料等を徴収しない。（なお授業料については、協定の中で「相互不徴収」について合意する必要がある）

⑧ カリキュラム：98年度に開設された授業科目は、3つの形態から構成されている。「特設科目」は、HUSAプログラムの学生のために特別に開設された英語による授業であり、「常設科目」は、すでに総合科学部で開設されていたものに、HUSAプログラムの学生が登録した場合、英語を交えた授業にするという条件のついた授業であり、日本人学生と共に履修するものである。第3に「日本語関係科目」は主に教育学部が開設している日本語・日本事情の科目である。また、授業科目はそれぞれの学部が開設しているものであり、その統轄は各学部で行われている。以下が98年度に開設された授業科目一覧表である。

1998年度（98年10月～99年7月）授業科目一覧

1. 特設科目

授業科目名	単位数	開講学期	備考
アジアの哲学と宗教	2単位	秋学期	文学部
比較教育学	3単位	秋学期	教育学部
カリキュラム開発論	2単位	秋学期	教育学部
日本のスポーツと文化	3単位	秋学期	教育学部
日本の文化と教育	2単位	秋学期	教育学部
国際理解のための教材開発	2単位	秋学期	学校教育学部
日本の社会経済システム	2単位	秋学期	経済学部
経済学の統計分析	2単位	秋学期	経済学部
日本の総合商社	2単位	秋学期	総合科学部
応用微生物学	2単位	秋学期	生物生産学部
微生物生態学研究法	2単位	秋学期	生物生産学部
材料科学概論	2単位	秋学期	理学部

特別課題研究	4 単位	秋・春学期	
仏教学	2 単位	春学期	文学部
日本の心理学研究	2 単位	春学期	教育学部
日本語の言語学概論	2 単位	春学期	教育学部
開発教育論	2 単位	春学期	教育学部
カリキュラム開発論	2 単位	春学期	教育学部
日本の家庭生活	2 単位	春学期	教育学部
日本の教育	2 単位	春学期	学校教育学部
日本社会の社会科学的分析	2 単位	春学期	法学部
世界から見た日本	2 単位	春学期	経済学部
生命科学概論	2 単位	春学期	理学部
野外学習 B	2 単位	春学期	理学部
材料科学概論	2 単位	春学期	理学部
応用化学と生物工学概論	2 単位	春学期	工学部
平和と人権	2 単位	春学期	HUSAプログラム 実施委員会

2. 常設科目

授業科目名	単位数	開講学期	備考
現代演劇映画論	2 単位	秋学期	総合科学部
社会・人類言語学演習	2 単位	秋学期	総合科学部
児童文学論演習	2 単位	秋学期	総合科学部
女性学特別演習	3 単位	秋学期	総合科学部
関数解析	2 単位	秋学期	総合科学部
計算機インターフェース論	2 単位	秋学期	総合科学部
環境化学	2 単位	秋学期	総合科学部
地球科学の実習Ⅲ	2 単位	秋学期	学校教育学部
電気工学Ⅳ	2 単位	秋学期	学校教育学部
教育における基礎聴力測定	2 単位	秋学期	学校教育学部
複合関数Ⅰ	2 単位	秋学期	学校教育学部
現代数学の課題	2 単位	秋学期	理学部
現代演劇・映画論演習	2 単位	春学期	総合科学部
言語応用論演習	2 単位	春学期	総合科学部
言語思想論特別講義	3 単位	春学期	総合科学部
現代詩論特別演習	3 単位	春学期	総合科学部
量子力学演習	2 単位	春学期	総合科学部
生体防御学	2 単位	春学期	総合科学部
環境科学野外実習	2 単位	春学期	総合科学部
日本総合商社Ⅰ	2 単位	春学期	総合科学部
美術（モデリング）	2 単位	春学期	学校教育学部
音楽概論	2 単位	春学期	学校教育学部
調理実習	2 単位	春学期	学校教育学部
幾何学	2 単位	春学期	学校教育学部
コミュニケーション概論	2 単位	春学期	学校教育学部

3. 日本語関係科目

授業科目名	単位数	開講学期	備考
日本語・日本事情 A	2 単位	春学期	総合科学部
日本語・日本事情 B	2 単位	秋学期	総合科学部
日本語レベルⅠ A	2 単位	秋・春学期	留学生センター

日本語レベル I B	2 単位	秋・春学期	留学生センター
日本語レベル I C	2 単位	秋・春学期	留学生センター
日本語レベル I D	2 単位	秋学期	留学生センター
日本語レベル II A	2 単位	秋・春学期	留学生センター
日本語レベル II B	2 単位	秋・春学期	留学生センター
日本語レベル II C	2 単位	秋・春学期	留学生センター
日本語レベル II D	2 単位	秋・春学期	留学生センター
日本語レベル II E	2 単位	秋・春学期	留学生センター
日本語レベル II F	2 単位	秋・春学期	留学生センター
日本語レベル III A	2 単位	秋・春学期	留学生センター
日本語レベル III B	2 単位	秋・春学期	留学生センター
日本語レベル III C	2 単位	秋・春学期	留学生センター
日本語レベル IV A	2 単位	秋・春学期	留学生センター
日本語レベル IV B	2 単位	秋・春学期	留学生センター
日本語レベル IV C	2 単位	秋・春学期	留学生センター
日本語レベル V A	2 単位	秋・春学期	留学生センター
日本語レベル V B	2 単位	秋・春学期	留学生センター
日本語レベル V C	2 単位	秋・春学期	留学生センター
日本語レベル V D	2 単位	秋・春学期	留学生センター
日本語レベル V E	2 単位	秋・春学期	留学生センター
日本語レベル V F	2 単位	秋・春学期	留学生センター
日本語レベル V G	2 単位	秋・春学期	留学生センター
日本事情 A	2 単位	秋・春学期	留学生センター
日本事情 B	2 単位	秋・春学期	留学生センター
日本事情 C	2 単位	秋・春学期	留学生センター
日本事情 D	2 単位	秋・春学期	留学生センター
日本事情 E	2 単位	秋・春学期	留学生センター
日本事情 F	2 単位	秋・春学期	留学生センター
日本事情 G	2 単位	秋・春学期	留学生センター

- ⑨ 受け入れ体制の整備：(1)学生宿舎（日本人・留学生混住型）を用意するとともに、ホームステイ受け入れ家庭との交流も促進する。(2)日本人学生チューターを事前に配置し、受け入れ開始と同時に留学生を支援する。(3)入国時身元保証人としては、各指導教官に依頼しないで、機関保証（広島大学）とする。

II. 1998年度HUSAプログラム受け入れ状況

98年度は、アメリカ、オーストラリア、マレーシア、スウェーデン、オランダ、イギリスの 8 大学から計21名の留学生を受け入れた。期間は、殆どの学生が1年間の滞在を希望しており、男女別で見ると男子学生12名、女子学生9名であった。

派遣国	大学名	期間	人数 (男：女)
アメリカ	フロリダ州立大学	1年	3名 (2：1)
	メリーランド大学	1年	1名 (1：0)
	ミネソタ大学	1年	4名 (4：0)
カナダ	カルガリー大学	1年	0名 (0：0)
オーストラリア	ニューイングランド大学	1年	3名 (2：1)
マレーシア	マラヤ大学	1年	3名 (0：3)
スウェーデン	リンシューピン大学	1年	2名 (0：2)
オランダ	アムステルダム大学	半年	2名 (1：1)
イギリス	リーズメトロポリタン大学	1年	3名 (2：1)
合計			21名 (12：9)

所属学部別

所属学部	人数 (男：女)
総合科学部	4名 (2：2)
文学部	2名 (1：1)
教育学部	4名 (2：2)
学校教育学部	1名 (1：0)
経済学部	7名 (6：1)
法学部	1名 (0：1)
理学部	0名 (0：0)
工学部	2名 (0：2)
合計	21名 (12：9)

III. 1998年度HUSAプログラム受け入れ活動

- ① 選考：1998年度募集要項は、昨年1～2月中に派遣大学へ配布され、3～4月に各大学から参加希望者が推薦された。そして、5月には、本学の選考委員会によって正式決定された。
- ② 渡日前の情報の提供：渡日前のオリエンテーションを兼ねて広島大学及び留学生生活に関する情報を網羅した英語版の「短期交換留学生用引き」を各学生に送付した。この手引きは、前年度の短期交換留学生によって作成されたものである。また、学生の個人的な質問等には、電子メールとファックスを活用し、個々のケースに対応した。
- ③ チューターオリエンテーション：日本人学生チューターに対し、今年度は2回の説明会を行った。第1回目は、チューターとしての全般的な支援活動の内容について説明し、第2回目は、渡日後1週間の事務手続き並びに寮へ入居するまでの具体的な支援活動についてオリエンテーションを行った。

- ④ 見学研修：留学生センターが実施している見学研修に参加する形で短期留学生にも宮島、尾道、松山等、中国四国地方の史跡見学、また、企業訪問等を行っている。その他にも短期プログラム用特設科目の指導教官が授業の一貫として独自に様々な見学旅行を実施している。
- ⑤ 授業科目の開設状況：短期プログラム用の開設科目数は、毎年、順調に増加し、今年度は、84もの科目が短期留学生の為に開かれた。特に今年度は、留学生センターで開設されている日本語教育科目が5つのレベルに分割され協定校との単位互換が円滑に行われるよう、それぞれのレベルごとに履修条件（pre-requisite）が整えられた。また、その条件に基づいてそれぞれのカリキュラムの内容も調節されつつある。
- ⑥ 履修状況：今年度の秋学期の履修状況は、過去2年の状況と概ね同様で全員が10～12単位、授業科目数にして、6～9教科授業を履修している。多くの学生は自分の専門分野以外の教科にも積極的に参加している。特に、日本語の履修の比率の多さは、昨年に続き顕著に現われている。
- ⑦ 文化交流支援活動：日本人との異文化間理解を目的とした親善交流は、過去2年間のプログラムではさほど実現出来ずに来た。今年度は、そうした状況を踏まえ、昨年から参加している広島市が企画する「ビッグジャンボリー」国際交流プログラムや新規に始められた口和町ホームステイプログラムへの参加、東広島ホストファミリークラブとの交流会、クラブ活動への参加の支援等を行って来た。また、本年度から当留学生センターの指導部門が開始した国際交流ボランティア制度を利用し、日本人学生の会話パートナーを短期留学生に紹介した。会話パートナーとの交流は、留学生の日本人学生との交友関係を著しく充実させ、過去2年間の短期留学生がよく口にした「疎外観」という言葉は今年度の留学生からは、ほとんど聞かされていない。こうした日本人との交流の場をより多く与えたことは、留学生の精神面での安定を作り出しただけでなく、プログラム全体の内容改善に大きく寄与した。

IV. 1997、98年度HUSA留学生派遣計画

本校の短期留学生派遣は、1998年度までに既に2回実施されており、また、1998年度派遣留学生の選考も既に終えている。例年、12月24日に応募者の選考試験を行い、翌年の1

～2月中には実施委員会で選考、3～4月に受け入れ大学へ推薦という日程で選考・推薦を行っている。以下は、派遣学生の募集に関する資料の一部を抜粋したものである。

広島大学短期交換留学(HUSA)プログラム 派遣学生の募集について

1 制度の趣旨：

短期交換留学プログラムは、学部生・大学院生が短期学生交流協定等に基づいて母国の大学に在籍しつつ、派遣先の大学において学習、異文化体験、語学の実地習得等を目的として、概ね1学年以内の1学期又は、複数学期教育を受けて単位を取得し、研究指導を受ける制度で、平成8度後期から、アメリカ、カナダ、オーストラリア、マレーシア、ドイツ、オランダ、スウェーデン、中国、イギリスの大学から主として学部学生を短期交換留学生として招致し、本学の学部学生を各国各協定大学に派遣するという相互交流事業である。この交流事業は派遣先大学において授業料不徴収及び単位互換認定の制度を内容としており平成11年度の派遣学生を別紙の通り募集します。

2 出願書類：

- ① 申請書
- ② 留学計画書
- ③ TOEFL成績表 (530点以上が望ましい。)
- ④ 学業成績証明書

3 出願書類提出締め切り：平成10年11月25日 (水)

4 選考：

応募条件を満たしている者に対し、留学計画、TOEFL成績、学業成績及び面接(口述)試験の結果に基づき選考する。第二希望大学まで選考の対象とする。

5 面接(口述)試験日：平成10年12月24日 (火)

6 決定：平成11年2月ごろ協定校へ推薦し、最終決定は協定校の決定によるものとする。

V. HUSA留学生派遣事業の実績

1998年8～9月の短期交換留学生派遣に関しては、既に18名の応募者の内11名を推薦し、アメリカ、カナダ、マレーシア、スウェーデン、ドイツの6大学へ派遣した。そして、オーストラリアのニューイングランド大学へは、1999年2月に1名を派遣している。また、1999年度派遣留学生に関しては、すでに第1次募集では、36名が応募し、内18名は推薦が決定

している。さらに、1999年2月には第2次募集を行い、8名の応募者の中から4～5名の推薦者を選考中である。派遣校に関しても昨年までの派遣先に加え、アムステルダム大学やイギリスのリーズメトロポリタン大学等への派遣がすでに決定している。

VI. HUSA留学生派遣事業の活動状況

本学の学生に海外留学の機会を増やすことが、広島大学の短期交換留学プログラムの重要な任務の一つであることから、1998年度にもいくつかの活動を行った。第1の活動は、海外留学に際し必要な現地校の事情を網羅したガイドブックの作成／再編集である。これは、98年度に協定校から派遣されてきた留学生が、母校に関する知識と経験を基に作成したものである。今年度は、フロリダ州立大学、メリーランド大学、リンシューピン大学のパンフレットの再編集と新規協定校であるリーズメトロポリタン大学のパンフレットの作成を行った。第2の活動は、派遣前のオリエンテーションの開催で、毎年、留学に関する一般的な情報と共に、協定校から来ている留学生との交流の場を提供している。また、広島大学と協定校の学生交流はその後も続き、現在は、協定校においても様々な交流活動が行われている。最後に、海外留学の機会をより多くの学生に認識してもらうため、98年の5、6、10月の3回に渡り短期交換留学プログラムの説明会を開催した。こうした説明会は今年度で2年目を迎え、毎年約150名程度の学生にプログラムに関するガイダンスを行って来た。こうした広報活動の影響か、今年度は過去2年間の約倍の応募者数があった。今後ともより多くの説明会やその他の広報活動を続け、一人でも多くの日本人学生を派遣できることを期待している。

VII. その他の活動

①「留学生に聞く短期交換留学プログラムの現状と課題」の開催：

1998年2月12日に、全国の国立大学の短期交換留学生代表並びに担当教官の参加の下、留学生センターは講演・討論会「留学生に聞く短期交換留学プログラムの現状と課題」を開催した。今回の講演・討論会は、これまで行われてきた短期プログラムの担当官、関係者による討論会とは違い学生代表者から直接意見を聞くという新たな試みであった。以下が、プログラムの日程、参加者リスト並びに学生から出た意見のまとめである。

A. 日程

- 9：30-10：00 受け付け開始
- 10：00-10：10 多和田眞一郎留学生センター長挨拶、
長谷川伸次短期プログラムディレクター挨拶
- 10：10-10：30 参加者自己紹介
- 10：30-12：00 テーマ1「協定校の送り出し体勢」
(司会：堀田泰司、広島大学留学生センター)
- 12：00- 2：00 懇親会
- 2：00- 3：30 テーマ2「日本の生活環境への適応」
(司会：太田浩司先生、名古屋大学留学生センター)
- 3：30- 4：00 休憩
- 4：00- 5：30 テーマ3「日本の大学教育と留学目的の達成」
(司会：ピーター・フィルコラ先生、北海道大学留学生センター)
- 5：30- 6：00 総括 (司会：長谷川伸次、広島大学留学生センター)

B. 参加者リスト

- 北海道大学 常田益代教授、留学生センター
ピーターフィルコラ助教授、留学生センター
Mr. Ouchi, Kevin T. (アルベルタ大学、カナダ)
- 東京大学 塚本明子教授、大学院総合文化研究科
Mr. RODRIGEZ, Andres H. (チリ・カトリック大学、チリ)
- 横浜国立大学 山田光義教授、留学生センター
Mr. Kirsch, Peter (サンディエゴ州立大学、アメリカ)
- 名古屋大学 太田浩司助教授、留学生センター
Mr. Stevant, Sylvan (グノーブル大学、フランス)
- 京都大学 砂村 賢教授、留学生センター
Mr. Ttoouli, Michael (サセックス大学、イギリス)

- 大阪大学 中村収三 教授、留学生センター
北濱榮子助教授、留学生センター
Ms. Tung, Stella (ワシントン大学、アメリカ)
- 九州大学 水戸考道教授、留学生センター
- 岡山大学 斎藤美智子教授、留学生センター
- 広島大学： 多和田眞一郎教授、留学生センター長
長谷川伸次教授、留学生センター
短期交換留学プログラムディレクター
浮田三郎教授、留学生センター
二宮皓教授、教育学部、短期交換留学プログラム実施委員会
委員長
稲田勝彦教授、総合科学部、短期交換留学プログラム実施委員会、
副委員長
景山三平教授、学校教育学部、短期交換留学プログラム実施委員
中川正弘助教授、留学生センター
深見兼孝助教授、留学生センター
田村泰男講師、留学生センター
堀田泰司講師、留学生センター
短期交換留学プログラムコーディネーター
橋本敬司講師、留学生センター
阪田泰和助手、留学生センター
田中共子助手、留学生センター
- 広島大学短期交換留学生
Ms. Stokes, Rachel J. (ニューイングランド大学、オーストラリア)
Mr. Perez, Silvio G. (アムステルダム大学、オランダ)
Mr. Sithambaram, Mohan K. (マラヤ大学、マレーシア)

C. 学生からの意見のまとめ

この講演・討論会では、学生が各国立大学の短期プログラムの現状を報告し、プログラムの今後の課題といくつかの具体的な改善策を提言した。彼らの意見は実体験に基づいた極めて現実的なものであり、全国の短期交換プログラムの担当教官にとっても、とても有意義なコメントであったと思う。以下が学生から指摘されたいくつかの問題点とその改善策である。

協定校の送り出し体勢：第1の問題点としては、短期プログラムに関する情報が留学生の母校では、学生の手にはほとんど渡されていないという現実である。また、渡っていたとしてもプログラムのパンフレットでは、具体的なカリキュラムの内容等が分からず、学生が留学を考えるとと言う点ではあまり参考にはならないようである。さらに、渡日前のオリエンテーション等もほとんど行われておらず、また、単位互換に関しても指導教官と具体的な相談をしてきている学生は少なかった。

今後の対応策としては、協定校に頼るのではなく、寧ろ日本の大学側からインターネットのホームページ等を媒介に、短期プログラムの全容やカリキュラムの具体的内容を紹介し、興味のある学生に直接情報を流す努力をするのが妥当なようである。また、協定校の学生からの質問には、担当教官、事務官だけでなく、すでに来ている短期留学生にも協力してもらい、次年度の留学生と直接交流してもらおうべきであると言う指摘が多かった。最後に、短期プログラムのパンフレット等は、協定校の交換留学プログラム担当官だけに送付するのではなく、アジア研究や日本語教育の学部、学科にも配布しておく方が確実に日本留学に興味ある学生に直接情報が流れるようである。

日本の生活環境への適応：第2の問題点としては、多くの学生から日本人、特に日本人学生との交流の場の少なさ、難しさが指摘された。確かに、大学、民間ボランティアグループによる様々な国際交流活動、例えば、渡日後1、2週間程度行われる学生チューターの支援活動、地域ボランティア団体の国際交流活動、ホームステイプログラム、ホストファミリー制度などに対する留学生の評価は高かった。しかし、問題は、日本人学生との交流の場が少ないことである。一つは、学生の多くが留学生だけの学生寮に住んでいること、また、多くの授業は、短期留学生だけに開講されていること等が日本人学生との交流の場を少なくしている大きな原因であると留学生は指摘している。さらに、日本人学生と混住型の学生寮に住んでいても、特に男子寮では、交流に積極的な学生が少なく、交流は難しいようである。しかし、女子寮では、寮や階によって状況はまちまちであり、個人差によっ

て交流の度合が違うらしい。

今後の対応策としては、現行の地域ボランティアグループとの国際交流、ホームステイ・ホストファミリープログラム等の活動をさらに充実させるとともに、住居、授業、クラブ活動等の大学生活全般に渡り、もっと日本人学生と共に生活、行動できる場を築きあげることが必須のようである。特にクラブ活動への参加は、日本人学生と親密な友好関係が築けるとても有効な手段であるので、大学側も積極的にクラブ活動の斡旋に勤める必要があろう。

上記の問題に関しては、広島大学留学生センターでは、今年度より、特に効果的な方策を施行したので、ここに特記しておきたい。セクションⅢの⑦で記述したように当センターは、本年度より、広島大学の学生を集い、国際ボランティア制度を設立した。この制度の具体的な内容に関しては指導部門の報告に記述されているが、この制度の確立によって、センターの抱える留学生と日本人学生との個々のレベルでの交流の場が非常に増えたことを指摘しておきたい。今まで、大学や地域ボランティア団体等が留学生のために企画してきたものの多くは、短期留学生全体を一つのグループとして交流する機会が多く、個人的、私的レベルでの交流は、システムティック且つ大がかりには行われてこなかった。そのため、現実的には留学生が自発的に交流しようとしないう限り、日本人との個人的な付き合いは、なかなか可能にならなかった。しかし、当センターの国際ボランティア制度は100名以上の学生ボランティアの登録があり、留学生と交流したい日本人学生をチューターや会話パートナーとして留学生一人一人に紹介できるだけでなく、センターが企画する交流活動等を通して、一つの新しい国際交流グループを築き上げることができた。短期留学生だけを見ても、日本人学生との交流の希薄さに関しては、過去2年間の状況とは非常に異なり、今年度の留学生からは日本人との交流に関する苦情はほとんど聞かれない。国際ボランティアの今後の成果に大いに期待したいものである。

日本の大学教育と留学目的の達成：最後の問題として、日本の短期プログラムのカリキュラムの内容や教授法に関して留学生の意見を聞いた。まず、留学目的としては、やはり、分野を問わず多くの留学生は、日本語、日本文化に興味があり、日本の文化、歴史、経済、社会等の授業の拡充を希望している。また、特に書道、華道、剣道等の体験型学習の科目または、課外活動に関しては、評価が高かった。教授法に関しては、個人差が大きいという指摘が多かった。この問題に関しては、日本人の教官が英語で科目を開講するというハンディキャップを充分理解しており、教官の努力を留学生の多くは認めていた。しかし、重要な課題として、教官の英語力が問題なのではなく、短期留学生用にあえて学術的レベ

ルを下げて開講されている科目が多いことに問題があると言及していた。留学生の中から、「英語がさほど流暢でなくとも、自分の研究分野に関し、日本人学生を対象としている通常科目と内容が同等の授業をして下さる教授の講義が一番楽しかった」という意見もあった。もう一つの問題点として、テキストブックや資料、さらに定期的な宿題や小試験等もほとんどない科目が以外に多いことを指摘していた。日本では、授業の評価活動は往々にして学期の最後に集中しており、欧米系の留学生にとっては、自分の習得レベルが確認できないので、不満が残るようである。最後の問題点としては、コンピュータのアクセスが限られている大学が多いことである。日本の大学の多くは、コンピュータ・ラボがあったとしても、利用時間は制限されており、特に週末コンピュータを利用するのは非常に困難である。これは、コンピュータをかなり自由に利用できる環境にいた欧米系の留学生にとっては、かなり深刻な問題である。

今後の課題としては、教育内容のレベルを通常開かれている授業と同等に保ち、より多くの教材の提供と評価・フィードバック活動を行うことが不可欠なようである。また、日本の文学、歴史と言った分野のやや専門的な科目も積極的に短期プログラムのカリキュラムに含め、留学生のニーズにあったプログラム作りに励むべきであろう。最後に、短期プログラム用のコンピュータやラボ施設の確保は留学生の授業への参加をより円滑に行う上で重要な課題であるので、機器、施設の拡充と共に利用時間の拡大等の努力が今後とも必要であろう。

研究員・客員研究員制度について

多和田 眞一郎

広島大学留学生センターでは、発足（1990年6月8日）以来、それぞれの教育・研究に精進してきたが、研究面の一層の充実・発展を図るべく、1998（平成10）年度より研究員・客員研究員制度をスタートさせる。研究員は広島大学内の、客員研究員は学外の、それぞれしかるべき方々をお願いする。

任期は2年で（今回は、1998年4月1日～2000年3月31日）、再任を妨げない。

「条件」は、以下のとおりである。

- (1) 研究員・客員研究員（以下、「研究員」）は、留学生センターの研究調査に協力する。
- (2) 研究員は、研究成果・調査報告を留学生センター発行の紀要・報告書等に発表することができる。
- (3) 研究員は、留学生センターを利用し、研究会・講演会・討論会等に参加することができる。
- (4) 研究員は、特定の義務を負わない。
- (5) 研究員は、無給とする。

今回の研究員・客員研究員の氏名・所属を、以下に紹介する。

(研究員)

- 黒田則博（教育開発国際協力研究センター） ○西川節行（学生就職センター）
○二宮皓（教育学部） ○縫部義憲（教育学部） ○水町伊佐男（教育学部）
○迫田久美子（教育学部） ○高橋顕志（学校教育学部） ○福島博（工学部）
○町博光（教育学部） ○徐祝淇（経済学部） ○藤川信夫（教育学部） ○八木玲子（法学部）
○山岡和子（医学部） ○山本雅美（教育学部） ○佐藤暢治（教育学部）

(客員研究員)

- 今石正人（広島修道大学） ○奥村訓代（高知大学） ○川平博一（琉球大学）
○小山直人（電気通信大学） ○小脇光男（熊本大学） ○齊藤美智子（岡山大学）
○田畑千秋（大分大学） ○塚本明子（東京大学） ○中川良雄（京都外国語大学）
○中村収三（大阪大学） ○平澤洋一（城西大学） ○藤原雅憲（名古屋大学）
○古城紀雄（大阪大学） ○保崎則雄（神奈川大学） ○松井信行（東京外国語大学）
○水戸考道（九州大学） ○八重澤美知子（金沢大学） ○八木恵子（埼玉大学）

- 米山道男（北海道大学） ○池田伸子（九州大学） ○太田浩司（名古屋大学）
○小川誉子美（横浜国立大学） ○沖裕子（信州大学） ○金田章宏（千葉大学）
○金城尚美（琉球大学） ○小林ミナ（北海道大学） ○佐藤勢紀子（東北大学）
○實平雅夫（神戸大学） ○ジョージ・R・ハラダ（広島経済大学） ○高永茂
（広島文化女子短期大学） ○田中共子（岡山大学） ○中西泰洋（神戸大学）
○宮川康子（千葉大学） ○森真理子（京都大学） ○梅田泉（熊本大学）
○田崎敦子（東京農工大学） ○松尾馨（福山大学） ○峯正志（金沢大学）
○渡邊久美（広島経済大学） ○廣中環（H J Lひろしま日本語学校）
○後藤美知子（ひろしま国際センター）

講演・討論会 第1回研究集会

橋本敬司

今年度は、研究員・客員研究員制度が発足したことを契機に、従来行っていた講演・討論会を、第1回の研究集会として「二十一世紀の留学生教育に向けて」と題して開催した。2日間に亘って行われた研究集会では、現在の留学生教育と留学生を巡る環境を考え直すと共に、未来に向けての留学生教育の可能性を探る基調講演と、日本語教育、留学生指導、教育交流3部門、各2つの講演が行われ、それを巡って活発に討論が行われた。

詳細は報告書に譲るが、以下にプログラムと参加者名簿を掲載する。

プログラム

広島大学留学生センター主催 講演・討論会
第1回研究集会「二十一世紀の留学生教育に向けて」

1998年11月6日（金） 10時～17時

司会 浮田三郎、深見兼孝（広島大学留学生センター）

10：00－10：05 開会挨拶 多和田眞一郎 広島大学留学生センター長

10：05－10：20 研究員・客員研究員紹介

10：20－11：30 基調講演「二十一世紀の留学生教育に向けて」
二宮 皓（広島大学教育学部）

11：35－13：00 昼食

13：00－14：00 「日本語教育」部門

①言葉の選択・言葉の変容－大学における日本語と日本語教育－
藤原 雅憲（名古屋大学留学生センター）

②教養科目としての日本事情
斉藤美智子（岡山大学留学生センター）

14：00－14：10 休憩

司会 長谷川伸次、中川正弘（広島大学留学生センター）

14：10－15：10 「留学生指導」部門

①アドバイジングについて

古城 紀雄（大阪大学留学生センター）

②学生ボランティア制度の導入による留学生指導・助言活動の新しい展開

玉岡賀津雄（広島大学留学センター）

15：10－15：20 休憩

15：20－16：20 「教育交流」部門

①短期留学プログラムのメリットと可能性

－大学教育の国際化と21世紀の国際人養成をめざして－

水戸 考道（九州大学留学生センター）

②今後の留学生教育交流の展開－短期留学制度を中心に－

ジョージ・R・ハラダ（広島経済大学）

16：20－17：00 総括討論

18：00－20：00 懇親会

1998年11月7日（土） 10時～12時

司会 多和田眞一郎・橋本敬司（広島大学留学生センター）

10：00－12：00 全体討論「二十一世紀の留学生教育に向けて」

場所：広島大学 学校教育学部大会議室

参加者

留学生センター客員研究員

米 山 道 男	北海道大学留学生センター
小 林 ミ ナ	北海道大学留学生センター
佐 藤 勢紀子	東北大学留学生センター
宮 川 康 子	千葉大学留学生センター
金 田 章 宏	千葉大学留学生センター
八 木 恵 子	埼玉大学留学生センター
平 澤 洋 一	城西大学女子短期大学部
松 井 信 行	東京外国語大学 留学生日本語教育センター

小川 誉子美	横浜国立大学留学生センター
保崎 則雄	神奈川大学外国語学部
峯 正志	金沢大学留学生センター
藤原 雅憲	名古屋大学留学生センター
森 真理子	京都大学留学生センター
中川 良雄	京都外国語大学
中村 収三	大阪大学留学生センター
古城 紀雄	大阪大学留学生センター
實平 雅夫	神戸大学留学生センター
中西 泰洋	神戸大学留学生センター
斉藤 美智子	岡山大学留学生センター
松尾 馨	福山大学
ジョージ・R・ハラダ	広島経済大学
渡邊 久美	広島経済大学
高永 茂	広島文化女子短期大学
廣中 環	ひろしま日本語学校
後藤 美知子	ひろしま国際プラザ
奥村 訓代	高知大学人文学部
水戸 考道	九州大学留学生センター
池田 伸子	九州大学留学生センター
川平 博一	琉球大学留学生センター
金城 尚美	琉球大学留学生センター

留学生センター研究員

二宮 皓	広島大学教育学部
西川 節行	広島大学学生就職センター
福島 博	広島大学工学部
迫田 久美子	広島大学教育学部
山本 雅美	広島大学教育学部
徐 祝淇	広島大学経済学部

広島大学留学生センター教官

多和田 眞一郎
浮田 三郎
長谷川 伸次
中川 正弘

玉 岡 賀津雄
深 見 兼 孝
田 村 泰 男
堀 田 泰 司
橋 本 敬 司
金 田 智 子
阪 田 泰 和